

## 第7章

### 長浜市の高校生における県外進学と学力の関係

データサイエンス学部 平野葉菜

#### 1. 問題の所在

大都市への一極集中が進んでいる現在の日本では、地方の過疎化が問題とされている。過疎化とは、ある地域の人口が急激に減少し、その地域の生活機能を維持することが難しくなる状態が進行していることを表す。総務省地域力創造グループ過疎対策室（2023）の「令和3年度版 過疎化対策の現状（概要版）」によると、過疎地域の面積は国土の約6割を占めている。人口減少が進行した場合に想定される地方のまち・生活への影響について、国土交通省（2015）の「国土交通白書」では以下の5つをあげている。

- （1）生活関連サービス（小売・飲食・娯楽・医療機関等）の縮小
- （2）税収減による行政サービス水準の低下
- （3）地域公共交通の撤退・縮小
- （4）空き家、空き店舗、工場跡地、耕作放棄地等の増加
- （5）地域コミュニティの機能低下

さらに、人口減少による地方のまち・生活へのそれぞれの影響は、生活利便性の低下や地域の魅力の低下を通じて、さらなる人口減少を招くという悪循環に陥ることが危惧されている。そこで、人口減少を自らが居住する地域でも起こり得る身近な問題として認識を共有し、そのうえで、地域全体として人口減少がもたらす問題に立ち向かっていく必要があると、国土交通省は述べている。

このような問題背景から、本稿は地方に住む若者の都会への移住について考えていく。そのなかでも、進学をきっかけに移住する若者が多いことに着目し、進路選択における地域移動について分析を行っていく。

第2節では先行研究と仮説の検討、第3節では使用するデータの説明を行う。第4節で分析結果を述べ、第5節で結果に基づく考察を行い、第6節をまとめとする。

#### 2. 先行研究と仮説の検討

##### 2-1. 先行研究

進路選択における地域移動について分析を行うにあたり、どのような生徒が進学時に地元を離れ県外の教育機関に進学するのかを調査したい。そこで、地方における高校生の進路選択のメカニズムについて、先行研究から整理する。

遠藤と沖（2017）は、福島県の高校3年生を対象に実施した「高校生の進路と意識に関する調査」を元に、高校生の進路選択における地域移動に注目した分析を行っている。分析の結果、福島の高校生について、学力が地域を離れる際に影響していることが示された。

また、小林（2007）は、“高校生の進路を大きく規定している要因として第一にあげられる

のは、学力である”と記述している。

上で示した先行研究では、前者は福島県の高校生を対象にした研究であり、地域差があることが考えられ、後者は進路選択の要因についての研究で、県外進学する要因についてはあまり触れられていなかった。そこで、本稿では、どのような人が県外の教育機関に進学することを望んでいるのかを探る。

## 2-2. 仮説の検討

先行研究の検討から、今回の分析では滋賀県長浜市の学校に在籍している高校生を対象にどのような生徒が県外の教育機関に進学することを望んでいるのか仮説を立て検証する。

本稿では「学力が高い人ほど高校卒業後県外への進学を希望する」という仮説を立てる。学力が地域を離れる際に影響しているという結果が、遠藤と沖(2017)の先行研究でも出されているが、同じことが長浜市においても言えると考え。学力が高い人の方が進学先の選択肢が増え、より自分のやりたいことに合った学校に進学しようとするのではないかと予想されるからである。また、日本はまだまだ学歴社会であり、県外県内問わずレベルの高い学校に進学しようとするのではないだろうか。そのため、学力が高い人は滋賀県内にある高等教育機関よりもレベルの高い学校を望む人が県外進学をするのではないかと考える。しかし、今回の調査票では、本人の学力について問うことができなかつたため、勉強を好きかどうかは学力に大きく影響していると考え、国語・英語・数学の好き度と、所属高校の偏差値を用いて仮説を検証する。

## 3. 使用するデータと変数

### 3-1. 使用するデータ

使用するデータには、「長浜市中高生調査（こども若者実態調査）」のアンケートデータを使う。調査の概要を表1に示す。

表 1. 調査概要

調査名	長浜市中高生調査（こども若者実態調査）
調査対象	長浜市内の公立高校
調査時期	令和5年7月20日～9月11日
調査方法	インターネット調査（生徒に調査依頼および回答先のQRコード付き案内チラシを配付）
抽出方法	全数調査
サンプルサイズ	900

※調査の詳細は第1章に記載

### 3-2. 使用する変数

使用する変数について、従属変数には「高校卒業後、県内の学校または県外の学校に通いたいですか。（高校以上の進学を希望した人のみ回答）」を使用する。分析時は、「県外」を1、「県内」「わからない」を0とする二値変数に変換している。

独立変数については、「あなたの学校を教えてください。」の所属高校から高校の偏差値を使用したもの、「あなたは、次の教科がどれくらい好きですか。」の国語、数学、英語に

についてのそれぞれの回答を、4点尺度で好き度が高いほど数値が高くなるよう変換し、3教科の合計値にしたものを分析では使用した。

また、統制変数として「親の勧め（都会の有名大学進学）」、「親の勧め（親が将来の長浜市に居住することを勧める）」、「家庭の経済状況についての不安」について数値が高いほど肯定的になるよう変換したもの、「家庭の文化資本の数」、「性別（男性ダミー）」、「学年」を使用する。すべての変数について、無回答は欠損値とする。

表 2. 使用する変数の記述統計量

変数	長浜市在住(n=665)	
	Mean (%)	SD
従属変数		
高校卒業後の進学先		
県外(%)	36.8	
県内(%)	17.8	
高校まで(%)	29.7	
わからない(%)	15.7	
独立変数		
所属高校の偏差値	50.8	9.19
英語が好きか		
好きである(%)	17.3	
どちらかといえば好きである(%)	25.8	
どちらかといえば好きではない(%)	27.9	
好きではない(%)	29.0	
数学が好きか		
好きである(%)	16.5	
どちらかといえば好きである(%)	31.2	
どちらかといえば好きではない(%)	22.9	
好きではない(%)	29.4	
国語が好きか		
好きである(%)	15.2	
どちらかといえば好きである(%)	39.7	
どちらかといえば好きではない(%)	28.8	
好きではない(%)	16.2	
統制変数		
学年	1.62	0.72
性別		
男性(%)	44.3	
女性(%)	51.7	
その他(%)	4.0	
親の勧め（都会の有名大学進学）		
よく勧められる(%)	6.3	
たまに勧められる(%)	21.4	
まったく勧められない(%)	70.8	
親の勧め（将来の長浜市居住）		
よく勧められる(%)	8.3	
たまに勧められる(%)	25.3	
まったく勧められない(%)	65.0	
家庭の経済状況への不安がある		
そう思う(%)	34.9	
どちらかといえばそう思う(%)	32	
どちらかといえばそう思わない(%)	21.2	
そう思う(%)	11.9	
家庭の文化資本の数	2.55	0.81

#### 4. 分析

仮説をクロス集計表で示す。図1は偏差値と進学先についてクロス集計である。この図によると、県外に進学したい人の割合は、偏差値が最も高い学校の生徒で50.00%、2番目に高い学校の生徒で45.50%、3番目に高い学校の生徒で31.40%、4番目に高い学校の生徒で29.5%、5番目に高い学校の生徒で21.70%であり、偏差値が高くなるほど県外進学を希望する人の割合が高い。また、カイ二乗検定の結果0.1%水準で有意な差が得られた。

次に、英語、数学、国語それぞれについての好き度と進学先についてクロス集計したものを、図2、図3、図4に示す。これらの図によると、英語においては県外進学を望む人の割合が、好きであるでは46.80%、どちらかといえば好きであるでは40.50%、どちらかといえば好きではないで35.50%、好きではないで29.30%である。また、カイ二乗検定の結果、0.5%水準で有意な差があった。しかし、数学については、好きであるでは38.10%、どちらかといえば好きであるで38.60%、どちらかといえば好きではないで34.80%、好きではないで34.80%であり、カイ二乗検定の結果5%水準で有意な差はなかった。国語については、カイ二乗検定の結果1%水準で有意な差がみられたが、各回答の県外進学を望む人の割合は、好きであるが33.90%、どちらかといえば好きであるが42.30%、どちらかといえば好きではないが28.60%、好きではないが40.50%と、一番県外進学を望んでいる人の割合が多いのがどちらかといえば好きである、次いで好きではない、好きである、どちらかといえば好きではないという結果になった。

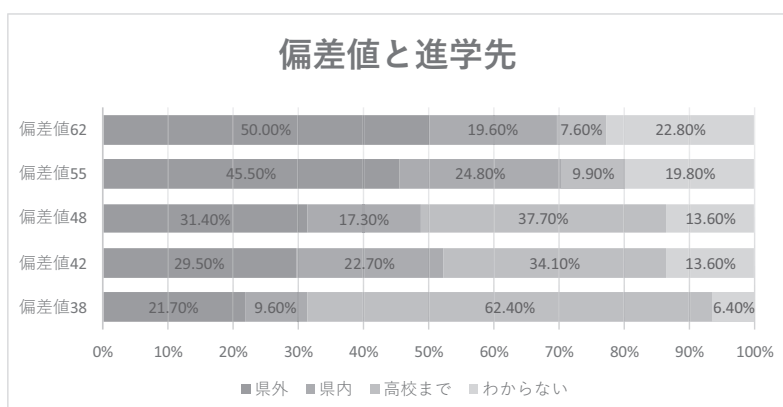


図1. 所属高校の偏差値と進学先

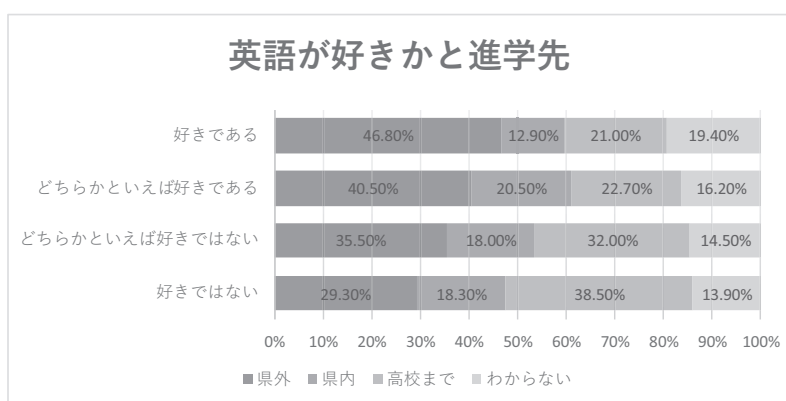


図2. 英語が好きかと進学先

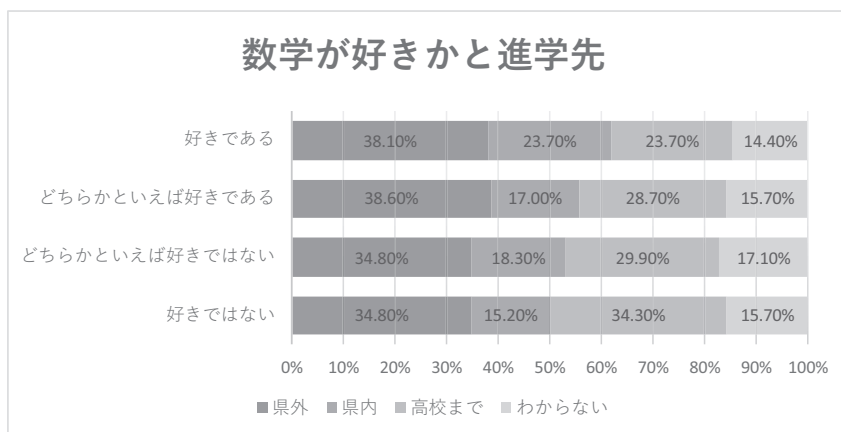


図 3. 数学が好きかと進学先

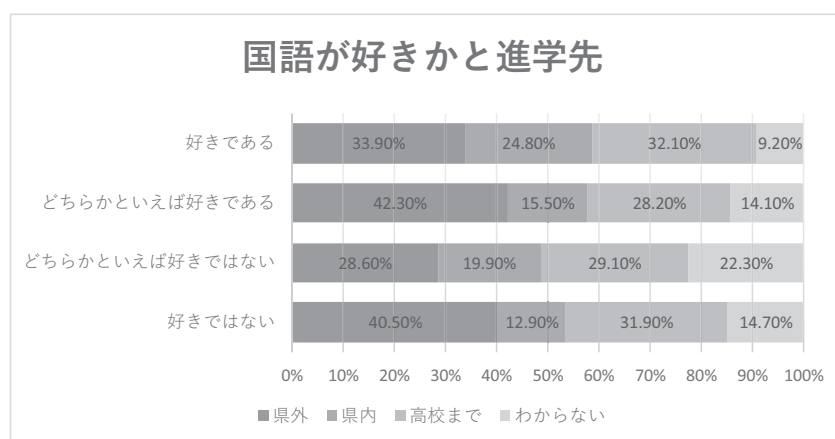


図 4. 国語が好きかと進学先

続いて、ロジスティック回帰分析の結果を表 3 に示す。表を見ると、有意水準 5%で有意な変数は「偏差値」「学年」「長浜市居住親の勧め」「都会の有名大学進学親の勧め」である。その中でも、オッズ比が 1 より大きい変数は「偏差値」「学年」「都会の有名大学進学親の勧め」で、オッズ比が 1 より小さい変数は「長浜市居住親の勧め」である。つまり、「偏差値」「学年」「都会の有名大学進学親の勧め」は値が大きいほど、「長浜市居住親の勧め」は値が小さいほど、県外進学を望んでいる確率が高いという結果になった。

表3. ロジスティック回帰分析の結果

	係数	標準誤差	オッズ比
偏差値	0.040***	0.01	1.041
三教科合算	0.025	0.045	1.025
男性ダミー	-0.178	0.175	0.837
学年	0.464***	0.122	1.59
家庭の経済状況への不安	0.054	0.086	1.055
長浜市内居住親の勧め	-0.493***	0.145	0.611
都会の有名大学進学親の勧め	0.616***	0.155	1.852
家庭の文化資本：合計	0.168	0.11	1.183
定数	-3.987***	0.655	0.019
n	665		
Cox-Snell R2 乗	0.113		
Nagelkerke R2 乗	0.154		
note: * p < .05, ** p < .01, *** p < .001			

## 5. 考察

分析の結果、三教科の好き度を合算した変数は有意水準 5%で有意ではなかったため、勉強の好き度が県外進学を望むかに関係しているのかはわからない結果となったが、偏差値が高いほど県外進学を望んでいることがわかった。単純な学力という面でいえば「学力が高い人ほど高校卒業後県外への進学を希望する」という仮説は採択されたといえるのかもしれないが、所属高校の偏差値のみでこの仮説が正しいといえるかはわからない。

今回の分析では、学力を測る指標として“所属高校の偏差値”と“各教科の好き度”しか用いなかったが、成績に関する情報などを得ることが出来ればもう少し学力と県外進学の関係を見ることが可能になるのではないかと考える。

また、仮説にはなかったが、統制変数として入れた親の勧めが2つとも統計的に有意であり、長浜市内居住を親に勧められる人ほど県外進学を望まず、都会の有名大学への進学を親に勧められている人ほど県外進学を望んでいることがわかった。この結果から、親からの勧めが本人の進学先に大きな影響を与えているといえるだろう。そして、親からの長浜市内居住の勧めが県外進学に負の影響を与えていることから、やはり進学先と将来の居住地には関係があるといえるのではないだろうか。

## 6. むすび

本稿の分析結果からは、学力と県外進学の間関係を明確に示すことはできなかったが、長浜市に居住する高校生において、所属高校の偏差値が高いほど県外進学を望むことが明らかになった。そのため、偏差値の高い高校に進学している生徒に向けて、自宅通学できる教育機関の紹介を積極的に行うなど、県内の教育機関に目を向けてもらえるような施策を

行うことで進学をきっかけとする地元離れを解消できるのではないだろうか。

#### 参考文献

総務省地域力創造グループ過疎対策室, 2023, 「令和3年度版 過疎化対策の現状 (概要版)」 (2024年2月7日取得, [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000875712.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000875712.pdf)).

国土交通省, 2015, 「国土交通白書」 (2024年2月7日取得, <https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/pdf/np101200.pdf>).

遠藤健・沖清豪, 2017, 「地方における高校生の進路選択の特性と要因——『福島県高校生調査』の分析」『早稲田教育評論』31(1):101-115.

小林雅之, 2007, 「高校生の進路選択の要因分析」『東京大学 大学経営・政策研究センターワーキングペーパー』19:1-14.